

紀伊國屋書店創業75年記念

「私の人生に最も影響を与えた1冊」

紀伊國屋書店創業75年を記念して、各界でご活躍の皆様へ、これまでの人生で最も影響を受けた「この1冊!」をとりあげていただきました。

※価格は全て本体(税別)です。

橋爪大三郎 (社会学者)

『構造人類学』

クロード・レヴィ＝ストロース 著／みすず書房
(品切れ・重版未定)

マルクス主義に疑問を感じていた頃、吉本隆明氏の「南島論」に触発されて、英語版の『構造人類学』を読んでみた。それまでのこだわりが氷解するような、開放感を味わった。弁証法とは全く異なった思考のスタイル。私は、自分のスタイルで思考していくことの勇気を与えられ、さらにヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』など、のちの社会学の仕事につながる古典を読んでいくようになった。

教えるべきことを教えないで「ゆとり」で
ごまかすのは子どもをバカにしている

教育の枠組みは戦後作られた「6・3・3・4制」のままだが、社会は根本的に変わった。高校進学率は96%を超え、現在の大学進学率は昭和30年代初期の高校進学率よりも高い。そのため、生徒全員が受験競争に巻き込まれる結果になり、教育システムは「平等な生徒の中から学力の劣る人になるべくたくさん見つけ出す」という「抑圧の装置」になってしまった。そこに起きたのが勉強意欲の喪失や低下、暴力、いじめ、不登校、学級崩壊、生徒のモラルハザードです。

臨教審は「高校全入・大学大衆化の時代」を迎えて修正をはかったが、システムの根幹である受験に手をつけなかった点が問題だった。一律競争である受験システムが変わ

らなければ、個性の重視も生涯学習への移行も国際化もできない。目標はよかったが、方法がなかったため、15年後の教育改革国民会議も同じ議論に終始し、受験システムをなくそうとは言えなかった。

受験に手をつけないで、学生の意欲低下に対応しようとする対症療法になる。

「学力が低下する」……それなら「詰め込み」だ。「生徒がストレスで可哀そうだ」……それなら「ゆとり」でいいこう——そういった繰り返しは「ブレーキとアクセルの踏み替え」でしかない。教えるべきことを教えないで、ゆとりでごまかすというやり方は、子どもをバカにしている。

私がかかわった社会経済生産性本部の提言は、簡単に言う「規制緩和」です。現在

の公立小中高校は、多くの法律で縛られ、人事も予算もカリキュラムも自由にならず、経営の工夫の余地がない。この際、学習指導要領など不要だと考えた方がいい。

規制をなくせば、良い学校に行く人と、ダメな学校に行く人と差がつくのではないかという議論があるが、一律に規制していると、むしろダメな方にレベルがそろってしまふ。今、これだけ教育機会は潤沢なのだから、子どもや親が学校を自由に選べるようにする必要はある。

良い学校は相応の評価を得る一方、良くない学校は改革の努力をする。教育サービスを提供する側が、親と子どもに対して責任をとるシステムを作るべきでしょう。(談)



橋爪大三郎
東京工業大学
教授(社会学)

2002-3-③

到着順

今年の執筆予定

アンケート

◎ 橋爪大三郎
社会学

『心』はあるのか』がちくま新書から出る予定。東工大で行なった吉本隆明シンポジウム、明治学院大で参加した九・一一テロをめぐるシンポジウムも本になるはずですよ。その他、懸案の本を一つずつ片づけていきます。

おまけ
共同出版ね
あこは

京 都 府 京 都 市 2002年(平成14年)10月21日 月 曜 日

吉本思想再評価の試み

■東京工大でシンポジウム

賛否論者が熱く討論



吉本隆明さん

六〇年安保闘争や全共闘世代に大きな影響を与え、その後も独自の考察を続けている思想家の全身像を読み解く「吉本隆明をめぐるシンポジウム」が、東京工業大の公開講座として開催された。「言語にとって美とは何か」「共同幻想論」「ハイ・イメージ論」「アフリカの段階について」

「一九六〇―一九七〇年代の主要著書を手掛かりに、現在の思想の地平から吉本思想を再構成する試みだ。」パネリストは明治学院大教授・加藤典洋、同・竹田青嗣、京大助教授・大沢真幸、司会が東京工業大教授・橋爪大三郎の各氏。七〇年前後に同時代としての吉本思想に親しんだ竹田、橋爪、「吉本アーム」に反感を覚えていた加藤、当時は小学生だった大沢。各氏の吉本体験の遺りもあって、議論が弾んだ。吉本の存在が大きいのは「ヨーロッパ思想が入ってくるのを待つて、使い回しする」戦後日本の思想界において、「全部一人で、オリジナルに根本的に考えた」(竹田)

どうにもなる。シンポでは「関係の絶対性」「対幻想」といった独自の概念が、マルクス主義国家論や党派的な思考を超えたと高く評価された。その上で、権力を悪として「国家の廃絶」を志向する姿勢には、「国家や権力は悪という考え方はなく、どういう権力ならいいのかと考えなければ」(加藤)などの異論が出た。討論が沸いたのは、ポストモタンの立場の人々から何かと批判される言本が、実は「真のポストモタニスト」であるという大沢氏のユニークな論。吉本思想から「思想の相対性を乗り越える超越的な他者」の視点を取り出すものだ。他の三人からは批判されたが、大沢の参加で同世代だけの議論にならなかったことが、シンポを刺激的なものにしたことは間違いない。強烈な個性を持った吉本隆明の思想から新たな意味をくみ出し、乗り越えようとする意気込みの伝わるシンポだった。